

トリニティ

〈プロローグ〉

補足ペーパー

トリニティ〈プロローグ〉 正誤表

- P 5 上段14行目 (誤) ヒトよって → (正) ヒトによって
- P 9 下段14行目 (誤) 天塩 → (正) 手塩
- P 18 下段13行目 (誤) 存在であるある → (正) 新たな存在である
- P 19 上段14行目 (誤) 気になる → (正) 本気になる
- P 24 上段5行目 (誤) 下と界は → (正) 下界とは
- P 25 下段19・20行目 (誤) 「 」 → (正) 『 』
- P 26 下段10行目 (誤) 作って一切 → 作っていた一切
- P 28 下段22行目 (誤) しなかつの → しなかつたの
- P 29 上段20行目 (誤) 伝えれば → 伝えなければ
- P 31 上段17行目 (誤) 限りに、 → 限りに泣く、

読み返して、余りの誤字脱字の多さに凹んだので、掲載。

PC変わったら、Word のバージョンも変わって、未だに慣れない(言い訳)。

そこはまぎれもなく源層界の一角ではあるものの、むしろ下界の気配を色濃く残す場所だった。そこが下界にあつては、悪魔の母胎、魔胎伝ノアと呼ばれた魔増妃の今の住処だった。

源層界で言うところの「下界」である、表層界の古くからの住民である彼女は、元々を辿れば源層界に縁のある者だった。歴史の中で偶然と必然が重なり、悪球域の主として無縁ゾーンに居を定めていた彼女は、次界に向かって進行中のヘッドロココを中心とする天使軍に敗れ、その身を砕かれた。

彼女の元々の因子は源層由来であるから、そう易々と損なわれはしなかったものの、下界において受肉した肉体は、一介の天使の手によって容易く失われるような弱いものであり、下界での魔増妃としての彼女の生はそこで終わった。そして、肉体のくびきより解き放たれ、彷徨う彼女の因子が縁深い源層界に引きつけられるのは、半ばは必然であり、それを今の源層界を総べる聖神ナディアが拾い上げたのは、必ずしも偶然だけには拠らないだろう。

ナディアによって拾い上げられた彼女の因子は、悪和合球を産み終わり、既に魔増妃としての役割をあらかた終えていたものの、それで源層界との縁が絶たれた訳でもなく、

かつての縁とナディアの慈悲により、その肉体が元通りになるまではこの源層界に留められていた。

この世界を統べる女神に、ただひたすら養生に努めよと温情込めて命じられたものの、そうと命じられるまでもなく、魔増妃としての力が完全ではない彼女には、他に何もすることはできず、限りなく無為に近い日々を、ひっそりと穏やかに送っていた。

波風の立たない水面にも似た静かな日々は、刺激こそ少ないものの、心を穏やかにする。その彼女の心の動きに応じるように、過去に一旦は閉じた悪和合球は再び開き、かつて次界超魔身と呼ばれた彼女の娘によく似た、もう一人の娘を生んだ。

卑弥太夫と名付けた、後に生まれた娘は、これまで彼女が生んだ多くの悪魔と同様に、生まれた時から既に一人前の娘の姿をしていた。主亡き悪球エリアでひっそりと生まれた娘は、微弱ではあるものの、聖と魔の両方の力を宿していた。それはかつて生まれた娘が、魔の力しか有していなかったのとは、対照的だった。

主を失い既に数えるほどしか残らぬ悪球を、独り静かに見守っていた娘は、今はナディアの計らいで、ここで彼女の身の回りの世話をしている。

若い娘が一人加わったといえども、それで隠者の暮らし

が著しく変わるべくもなく、彼女はひそやかにその日々を過ごしていた。

「母上、お客様です」

しかし、彼女の日々の営みはそれで全てではない。卑躬大夫に伴われた来客の正体にノアは居住まいを正した。

「具合は如何ですか、ノア？」

柔らかい声と共に姿を見せたのは、この源層界を統べる聖神ナディアだった。仮面に隠した素顔を決して晒すことはないものの、その声色は、その表情もまたその声と同様に、穏やかで落ち着いたものであることを窺わせる。

「これはナディア様、わざわざのお越し、痛み入ります」
札を執ろうとした彼女を、ナディアは優雅な仕草で制す。

「ああ、お気遣いなく。わたくしの気まぐれですから」

ナディアが此処を訪れるのは、決して珍しいことではない。源層界を、この世の主である超聖神より預かっているという自負があるのか、ナディアの心遣いは、それは細やかなもので、一度、源層界に所縁を持てば、それがどのような些細なものであろうとも、等しく心を砕く。

「もつたいないお言葉…かたじけなく存じます」

もつとも、それはノアのように、歴史の表舞台から半ばは退いている身にしてみれば、畏れ多いことだが、時には心に重い。

「いいえ。あなたが、心安らかに過ごしてくださればそれでよろしいですよ」

言葉の端に微笑が混じる。仮面の奥でもナディアが微笑んだようだった。彼女の心中を知らずか、それとも知っていないながら、看過しているのか、その物言いはあくまでも落ち着いたものだ。海千山千の源層界の住民を束ねるだけのことはあり、その素顔と同様に、この女神は決して、その本心を悟らせず、感情を乱すこともない。まるで全てを見通しているかのように、その声は常に穏やかだった。だが、それがこの女神の全てではないことも、彼女との縁が浅くはない彼女は知っていた。

「そうそう。先だつて遠目にはありますが、FUZZZY MR. を見かけましたよ…」

今も、女神が天候の話でもあるかのように穏やかに話題に挙げたのは、彼女の娘と天使の間に生まれた子のことだ。

「…左様ですか」

他に言い様もない。それは彼女にとつては、魔増妃の跡目を永遠に失ったことと等しい意味を持つ、未だに割り切れず、心に掛かる事柄の一つでもあった。

かつて下界で次界超魔身の名を冠したもう一人の娘は、今では次界創造の功によって、かつての天使で次界創造主と呼ばれた男と、二身で一の新界王の末席に連なる者とし

て、この源層界に籍を置いていた。FUZZY MR. はその二人の血肉を分け、力を継ぐ独り子だった。

同じ源層界にありながら、彼女は未だにこの娘と直接は顔を合わせてはいない。勿論、その伴侶である天使の男とも、その系子である幼子ともである。忘れもしない、下界の住民としての彼女の生を絶つたのは、他ならぬその男だったのだから。それは正当な戦いの結果であるものの、それで全てを割り切れるほど、ヒトの心は単調でもない。

それを裏付けるかのように、彼女が感じずにはいられない隔意に似たものを娘もまた持ち合わせているらしく、互いの親交が全くない訳ではなかったが、娘がこの隠居を訪れたことは未だなかった。

「折角の系子。そなたも一度、会ってみては如何ですか？ さすれば、わだかまりも解けましように……」

それが系子のみならず、娘とも顔を合わせようとしないう、彼女に対する柔らかな批判だということは容易に知れる。

「まだ、その時期ではございませんよ……」

穏便にはぐらかさうにも、この女神が相手では、容易くもない。

そもそも、その娘が生まれる時、その娘が魔増妃足りえぬこと、そしてその系子により、彼女が永遠に次の魔増妃の誕生を見ることは叶わないと告げたのはこの女神である。

その時の悲哀の記憶が未だ、癒えぬ古傷のように残る彼女にしてみれば、言葉一つ選ぶのも、慎重となる。

「そう、深く思い悩むこともないでしょう……。そうそう、貴女は人一倍、思いやりが深いので、昔から少し、考え過ぎるくらいがありましたね……」

搦め手で取り込まれるような錯覚に襲われ、彼女は一縷の救いを求め、すぐ側に控える娘の方を振り返った。

「……ああ、そうそう。卑弥太夫、そなたは会ったのだったね。どのような子だった？」

無言で控えていた娘は、突然、会話に引き入れられたものだったから、明らかに慌てたようだった。確かに、この娘は、彼女に命じられ、幾度かもう一人の娘の元を訪れたことがあった。彼女とて全くの無関心ではなかったのだ。

「え……あ、はい。不思議な子だと思えました……」

「？」

それは彼女にとつては思いもよらない言葉であり、常に沈着なナディアにとつても同様だったらしい。問いたげな二つの視線を受けて、まだ年若い娘は、そこにある答えを探すかのように、視線を泳がせた。

「それはどういう意味ですか？」

ナディアの声は慇懃ではあるが、逆らうことを許さない。

「ええと……何と、表現したら良いのか……。MR. 本人にそ

の自覚は無いようなのですが、小さな体躯に二つの力の氣配が等しく同居しているような雰囲気があの子にはありまして…それが不思議で。大抵は、どちらかの力が上回っているのですが、全く同じ按配なのですよね…」

最初こそ言い淀んだものの、話すにつれて、相手のことを思い出すのか、その口調は滑らかなものとなっていた。「その均衡が畏れ多いのですが、神籍にある方にも似ているのですよね…それでいて、その力は本当に弱くて。それが何とも言えず不思議で…上手くお伝えできているのか、少し、心許ないのですけれど…」

娘の言葉は初めて聞くものだったが、その内容以上にその口調が好意的であることが意外だった。

確かに、彼女の方から娘に、M.R.のことについて改めて尋ねたことはなかった。何時もは、息災について一言二言、交わすだけであったが、その裏にはこれほどの思いがあったのかと、何やら感慨深いものがあった。

それが女神の風いだ水面のような感情にも、多少の揺らぎをもたらしたようだった。たつぷりと一呼吸置いた後に呟かれたその言葉は、女神の言葉にしては、珍しく、幾らか感情が窺えるものだった。

「…かつて、聖と魔を持つ者と言えは、我等のように神の籍に連なる者か、我等が直接創り出した素朴な生命に限ら

れていたものですが、近頃は、我等の手に因らないそのような者達が、次界という限られた場所の中ではありますが、少しずつその数を増やしているそうですよ…」

それは彼女が久しぶりに聞く下界の話だった。女神が言うまでもなく、かつて、生命の誕生とはそれ自体が神秘であり、叡智であったものだが、当世ではそれは徐々に様変わりしつつあるらしい。

「下界の民が、聖魔に分かれたのは、必然であり、それが彼等をより高い段階にある生命に進化させたと思っていたのですが…必ずしもそうではないようです。現に、M.R.はその身に二つの力を、生まれながらに持っていますものね」

それから女神は、遠い昔の少女であった頃の日々を思い、微笑んだに違いない。次に呟いた声には、またこの女神が年若く未熟だった頃の、それ故の華やきを感じさせた。

「ノア…遠い昔、私がまだ少女であった頃、私はあの者によく似た若者に会ったことがあるのですよ…もう、記憶すら定かではないですが。今にして思えば、あれは、あの方だったのかもしれない…長い話になりますが、聞いていただけますか？」

「御意」

彼女に否と言えるべくもなかった。

後書

改めまして、こんにちは。

この度は、拙本「トリニティ<プロローグ>」を御手に取っていただきまして、まことにありがとうございました。

恥ずかしながら、本文の入稿が余りにもギリギリでしたので、本文中に入れそびれました上に、更に、宿でイベント当日の朝まで書いていたデータが跡形もなく消えてしまい、結局、書き直した後書き（とオマケ）です。

今更ですが 元々、この話は、マルコのパワーアップの際の要件として「記憶を取り戻す」と言うのが随所であったので、「じゃあ、失われた記憶があったこと？」が、始まりです。そこから「源層界である程度の記憶が形成されるまで育ってから下界に向かい、その過程で記憶を奪われた」の仮説に至り、まあ、同人屋的に、このような形となりました。

最初に「1」の部分のコピー本に掲載してから、何だかんだで、10年(!)が経っていました…まあ、無事に発行できて良かったです。今だから言えますが、実は「1」と「3」しか、元々は思い付けず、「エピソード(?)」も、「1」しかないような状態だったもので、自分としてはこのような形で発行しようとは余り考えてもいなかったのですが(笑;)。勿体無くも、部分掲載をしたコピーを読んでくださって、更には、続きを読みたいと仰ってくださった、某御方様の一言がなかったら、今、こうして後書も書いていないんだよなあ…と、しみじみと感慨深いものがあります。今更ではありますが、心から、お礼をば。しかし、如何せん、元が単なる「思いつき」に毛が生えたようなものでしたので、なかなか他が埋まらず、去年のオンリーでも、一回落としてしまいました。挙句、見返したら、一年前の原稿が使えたものではなく、結局、割引券の意味無い感じで…面目ない。

そんな本編で言葉が足りないと思った部分の補足で、名前の出てこない源層界の住人は、特定の誰とかではないです。私的BM感ですが、BM世界には歴史の表舞台に出てこない、それこそ、有象無象の住人がいて、更に、歴史の視点(中心?)が、「悪魔 VS 天使」なので、シールになるのはあくまで一部で、広い世界には、高次低次含めて、まだ名を知られていない住人が大勢いるんだろうなあ…ってとこです。シールになるのは、多少は名の通った歴史上の人物、的な。

あと、タイトルに「プロローグ」とありますが、この話は、これで終わりです。当初は、セットで、「エピローグ」も漠然と考えていたのですが、色々、BMの公式の話が変わってしまったので、書くこともないでしょう…と、だけでは意味不明ですが、実は、「トリニティ」というのは、新BM時代のことで、その前日談と後日談を自分なりに書きたかった、というのがあったのでした。マルコとネイロスの相討ち→休眠を経てパンゲラクシーと天聖界(SBM時代の)へ。並行してGD→パンゲアクター、オリン、ノア、卑弥太夫それぞれの動き…って感じでした。

そして、最後になりますが、勸の良い方はお気付きかと思いますが、本書は基本的に三本立ての三部構成なのですが、「2」のみ、二本立てとなっております…落としました(汗)。と、言うわけでこういう雰囲気の話を用意してましたということで、プロット段階ですが、おまけ代わりに、掲載させていただきます。

実は、オンリー当日の朝には、一応、完成していたんですが、色々あって、データが駄目になってしまい、結局、書き直したら、最初のとは微妙に？違う話になっていましたが、まあ、雰囲気ってことで。それでも、クオリティ的には、プロット段階って辺りが根性無いですが。

それでは簡単ではありますが、この辺で。また、お会いできることをこっそり祈りつつ…。

MTGN